

「瑠璃瓦」

張 愛玲 徐 青 訳

XU Qing

浙江理工大学准教授

【解題】

張愛玲の短編小説「瑠璃瓦」は、1944年上海雑誌公司により上梓された小説集『伝奇』に収録されているが、創作年月は1943年10月となっている。陳娟の「張愛玲研究資料への二点疑問」という論文では、「傾城の恋」「瑠璃瓦」が創作されたのは1943年8月18日以前であるとしているのだが、その根拠としたのは、平襟巫の「ある女流作家に関する千元の金」という一文であった。そこに「約一年前に張愛玲はいろんな短編小説を持ってきた」とあるため、陳娟は張愛玲が「瑠璃瓦」を創作したのは、1943年10月ではなく、少なくとも1943年8月以前に、既に「瑠璃瓦」は完成されていたというのである。陳娟の分析の細かさや慎重さには脱帽する。だが、10年かけて『紅樓夢』を考証し、『金鎖記』を24年かけて中国語と英語で4回も改稿し、「色・戒」を30年間近くかけて改稿する張愛玲のような完璧主義者にとって、出版までのあいだに、くりかえし書き直していたことは想像に難くない。

これまでの張愛玲研究では、イギリス小説家サマセット・モームの作品が、張愛玲に深く影響を与えたことは、よく知られている。また、アイルランド作家ジョージ・バーナード・ショーなどによる影響も明らかになっている。張愛玲自らもそのように語ったことがあった。しかし、18世紀イギリス女流作家ジェイン・オースティンの名前について、張愛玲は自ら一度も触れたことはなかった。だが、張愛玲の作品「瑠璃瓦」などの作品を読んでみると、張愛玲がオースティンにもかなりの影響を受けていたことがわかる。短編小説「瑠璃瓦」は、オースティンの最もよく知られている長編小説『傲慢と偏見』の人物像、内容、そして文章の構成と実によく似ているのである。

まず、「瑠璃瓦」も『傲慢と偏見』も、ともに「娘たちの結婚」を主題とした小説であり、もっとも似ているのは、両方とも、娘ばかりの家族であることである。前者は七人の娘を抱えた中産階級であり、後者は五人の娘を抱える郷紳である。

また、両作品とも「婚姻」を主題とする小説でありながら、両小説に語られている「婚姻」は、「感情」に及ばない、ただの経済問題、生存問題となっている。たとえば、「瑠璃瓦」主人公姚先生の三女心心の見合い相手の陳良棟は、ただの抽象的な存在で、陳良棟の顔立ちなどは重要ではない。彼は「杭州富豪のある一家の一人息子」である、それだけで十分なのである。キーワードは「財産」である。ところが、三女心心はまるで、『傲慢と偏見』の次女エリザベス・ベネットのように、愛情のない結婚などは絶対にせず、将来ベネット屋敷の継承人になる牧師コリンズをきっぱり断ったという点とよく似ています。

さらに、姚先生の長女琿琿とシャーロット・ルーカス、次女曲曲とベネット一家の末娘リディアとのイメージもよく重なっている。前者は「頼りになれる貯蔵室、将来食材と住まいに心配なくてよい」、後者は「純粹に性的な衝動によって行動し、将来についてはまったく心配していない」というようなキャラクターにおいても似ている。

張愛玲の「瑠璃瓦」には、興味深いところが多々あり、イギリスの田舎で起きた物語が、その150年後の20世紀1940年代国際都市上海での物語として展開されたとしても、何にもおかしくはない。なぜならば、「結婚」、「金銭」というのは、資本主義社会にとって共通する主題であることに変わりはないからである。さらに、『傲慢と偏見』の主人公は次女エリザベスであるが、張愛玲の「瑠璃瓦」では、主人公はその父である姚先生に置き換えられている。姚先生の人物像は、簡単に言えば、『傲慢と偏見』のベネット夫人とハンズフォード屋敷のキャサリン・ド・バーグ夫人の合成されたようなものであろう。ベネット夫人とバーグ夫人も、それぞれ娘たちの未来を心配しながら、自分自身の虚栄心や計算を満たせるよう、慎重に娘たちに「相応しい」結婚相手を探していたのである。

『傲慢と偏見』の結末が、ベネット一家の長女ジェインが金持ちの好男子チャールズ・ビングリーと、次女のエリザベスが大地主のダーシーと、そして、末娘のリディアはダーシーがエリザベスには内緒にウィッカムにお金を払いリディアと結婚させて、ハッピーエンドな物語であるとするならば、一方の「瑠璃瓦」の結末は、それほど目出度し目出度しといった物語ではない。辛うじて、唯一慰められるのは、姚一家の三女心心が、父の病氣中に、父には内緒で母に同伴されて一目惚れの程惠蕪と一緒に映画を見たりしたことにあるのかもしれないけれども、彼女の未来がどうなるのかが、また問題となる。

さらに、「瑠璃瓦」の結末では、まるでパロディであるかのように、姚夫人がまた妊娠するという設定になっている。他方で、姚先生自身は、自分はもう長くは生きられな

いと思っている。張愛玲がかつて記したように、「生命は一着の華美な蚤だらけの長衣」であり、人生に完璧なものはない。

なぜ、21世紀中国において、張愛玲ファンが増え、その熱が下がらないのか。現代中国人にとって、他の小説家より以上に、張愛玲に共感を覚えるのはなぜなのか。張愛玲の生きた時代、書いた作品をその観点から見ていくことによって、張愛玲の時代と文化に現代中国文化の一端を見ることができないのではないか。それが「瑠璃瓦」を翻訳した訳者の意図の一端であることを書き添えておくことにする。

姚氏には多産の妻がいた。生まれたのはみな娘であった。親戚たちは、「弄瓦・弄璋」¹⁾という話で姚氏をからかっていた。そして、姚夫人を「瓦のかまど」と呼んでいた。姚氏はまったく怒らなかつた。ただ、微笑んで、「われわれの瓦は美しい瓦で、普通の瓦などと言ってはいけない。われわれの瓦は瑠璃瓦なのである」と言った。

想像以上に姚氏の七人の娘のその美しさは、それぞれがそれぞれを超えているのである。不思議なことに、世間で古典的な美しさが流行すると、姚夫人から生まれたお嬢さまは楕円型の顔になる。楕円型の顔型が流行らなくなると、世間ではそれが垢抜けた瓜型顔に取って代わる。すると、姚夫人から新たに生まれてくる娘は瓜型顔なのである。西洋人の、目が大きく、長いまつげの崇拜が中国に伝えられると、姚夫人は忠実に流麗な訳筆を型どおり複製した。それでいてけして元の形を失うことはない。姚氏一家の模範美人は永遠に時代遅れになる危険がないのである。何にもかも時代に同調して世間のご機嫌をとっている。本当にうるわしく優雅なその娘は神様が人の思うようになさしめたようなのである。

娘は、その家の負担で金をつぎ込むだけであって、儲けにはならない存在である。だが、美しい娘はけしてそのような例には入らない。姚氏はそうした道理を良くわかっている。しかし、娘に頼って生きていくのは姚氏の生き方ではない。もちろん、先祖が家屋敷をすこしばかり残してくれたものの、姚氏の懐具合はよくない。姚氏はある印刷所の広告部主任という仕事をしている。その給料の一部を家庭の生活費の足しにするのだが、この大家族を支えるのは容易ではない。だからといって、姚氏は彼のもうすぐ花嫁になろうとしている娘に対して、急いでただ責任を逃れようなどとはしない。彼女たち

1) 「瓦」とは女の子が生まれること、「璋」とは男の子が生まれること。『詩経』に、「瓦」は、糸をつむぎながら巻き取る土器のことで、女の子が生まれるとそれを手に握らせるとあり、また、「璋」は玉器の一種で、男の子が生まれると手に握らせ、大きくなって玉のように美しい品徳を備えた人になるようにと願ったとある。

の前途について、姚氏には実に周到な計画があるのである。

姚氏は長女琤琤を印刷所の大株主の一人息子に嫁がせた。最初は、この縁談に琤琤はあまり満足してはいなかった。彼女は大学で二年間ぐらい勉強したので、交際範囲は広がった。しばらく、彼女が一心に好きになれるような人はあまりいなかった。可能性のある人は結構あった。自分で選んだ人と両親が選んでくれた人とでは、たとえ、それほど違わないにしても、結局のところ自分で選んだ人に偏る。それに、姚氏が彼女に選んだ人は、海外留学の経験もなく、学校での年級も彼女より低かった。琤琤は姚氏に激しく反対の意志表示していた。そこを姚氏がいくども懇切に説得し、さんざんことばを費やし、胸を叩いて、「今後、少しでもおまえの心になわれないようなことがあれば、私が責任を負うから」と保証をした。琤琤はその相手と何回か会ったが、相手に何かけちをつけるようなことは一度もなかった。不満でありながらも受け止めるほかなかったのである。姚氏は彼女の要求にしたがって、最新の方法を取り入れた。嫁入り道具を購入せず、現金で換算した。相手はとても裕福な家なので少なくてはいけない。姚氏は三万円をもったいないと思うことはなかった。

結婚指輪、服飾、新婚夫婦の寝室の家具ともに、琤琤と婚約者自ら選んだものである。新聞には以下のような結婚告示を掲載した。

熊致章	末息子	啓奎
	為	結婚啓事
姚源甫	長女	琤琤

この知らせは、姚氏が心をこめいろいろ考えて制作した、色とりどりに着飾った華やかな一団の四六駢儷体の文章である。文章の長さに限界があったので、彼は言いたいことを言い尽くせなかった。だから、また別に、「姚源甫は長女が帰山陰熊氏と結婚することを、親戚友人に知らせる」という文章をつくった。啓奎は姚氏が文章にうるさいのを嫌がった。自分のクラスメイトに知られたら笑われるのが恐ろしかった。琤琤は慰めて、「お父さんのやりたいようになさりなさいな。80歳以下の人たちはだれも注目しないわよ。」と言った。

結婚の三日後、琤琤は里帰りをした。琤琤は青狐の毛皮のコートを脱ぐと、その中には金色のシルクの半袖のチャイナドレスを着ている。まるで、金の花瓶の中の梔子の花のように、淡い白い楕円形の顔たちで、まぶたは一重だが、まぶたはすこし腫れているように見えても、目は明るくとても妙なる目であった。夫婦二人はまず姚氏夫婦にひぎをついたが、姚氏夫婦はすぐにそれを支えあげた。

言葉をかわしはじめてほどなくすると、女中が昼食の用意ができたことを知らせに来

た。宴席の中で、姚夫人は新婚夫婦におかずを配るのが忙しく、琤琤は、「お母さま、彼ことはすこし放っておいてくださいな。性格がちょっとへんで、ふかひれはあまり好きではないの」と言った。

「このアヒルは……」と姚夫人が尋ねる。

琤琤は、「あひるなら醤油で煮込んでいけば大丈夫よ」と言った。

琤琤は立ち上がって妹たちにおかずを配ったが、妹たちは「お姉さまご自分でお食べになって、私たちのことはどうぞお気遣いなく」と言った。

琤琤は自分のために一つ蝦を箸で挟んできたが、途中で、啓奎が箸を出し、その蝦を挟んだ。箸と箸がぶつかって、ふたりは目と目が合ったのでポツとして笑った。琤琤の顔が赤くなって軽く文句を言った。「理由もなく、なぜ私のものをとるの？」。

啓奎が笑いながら、「きみが私のためにおかずを取ってくれたのだと思ったものだから」と言った。

姚氏は、娘夫婦のきわめて親密であるのを見て、にこにことうれしそうだった。腕で夫人を押し動かして、「おまえ見てごらん、まるで二人は子どもみたいだね、まったく」と言った。

古くから新婚夫婦が里帰り²⁾の時、太陽が山に沈む前には帰らなければならないという習わしがあるのだが、啓奎と琤琤は姚氏の家でみんなとしゃべったり笑ったりしてとてもにぎやかであったので、この古い風習をあまり気にはしなかった。そのまま遊んで、夜十時ころに帰った。二人は三輪車に乗った。ちょうど旧正月の半ばを過ぎたところで、フランス租界の辺鄙な地域で、寒くはあったけれど、とてもきれいで清潔であった。霜が濃く月は薄い銀藍の夜であったが、一、二軒の店舗が強烈な電灯がつけていて、きらきらと輝いたショーウィンドーの中に「品」といった字の形に積み重ねられた一山の黄色い石鱈があった。まるで、童話の世界の中の、金の煉瓦で積み上げた砦のようである。

啓奎はすこし飲みすぎたようで、疲れた様子であったが、十本の指を交差しながら琤琤の肩を押さえ、顎も彼女の背中を押さえるようにして、ゆっくり言った。「きみのお父さまとお母さまは、私にまったくもったいぶるような接し方はしないね。」啓奎が話しをすると、暖かい息が琤琤の耳の元にかかってすこし痒かった。琤琤は微笑みながら、頭をすこし頷いたまま答えなかった。

啓奎また言った。「琤琤、ある人は、きみのお父さまがきみを私の家に嫁がせたのは、彼の仕事のためだというような人もいるけれど」。

琤琤は、「どういう意味ですか」と驚いた。

2) 結婚して数日後に嫁が婿を伴って里帰りすることを「回門」という。

啓奎は、「私が言っているわけじゃありませんよ」と急いで言った。

琿琿は、「あなたはそれをどこで聞いたのですか」と言った。

啓奎は、「先に教えておくれ、それでどうなの」と言った。

琿琿は、「あなたに教えることなどなにもありませんわ。私の父がたとえ物事の分からない人であったとしても、私はそうではありません。父の職業は一時的なものですけれど、私の結婚は一生の大事です。父のどうしてもよい都合のために私が自分を犠牲にするわけがありません」と怒って言った。

啓奎は頭を琿琿の肩に付き添った。琿琿は彼を押し動かして、「私が死人のように父のプレゼントとして他人に贈られる人間だと思うのですか。あんまり私を馬鹿しちゃいけません。」と大きい声で言った。

啓奎は笑いながら、「きみを馬鹿にする気何て何もないよ。孝行娘だと思っただけさ。」

琿琿は怒って、「私の家はそれほど立派なものじゃありませんけれど、私が自分を売って、父の埋葬する時はまだ来ちゃいませんから。」と行った。

啓奎は彼女の口を手で押さえながら、「騒がないで——冷たい風がお腹に入ったら、風邪ひくよ」と急いで言った。

琿琿は顔を変えて、ぷっと笑い出した。「私は騒いじゃいませんよ、あなたの方こそ騒がないで」。

啓奎また近づいて来て、「では、きみは何のために結婚したの?」と聞いた。

琿琿は怒って、「今になってもあなたはまだわからないの? いったい誰のために結婚したのか」と言った。

啓奎は優しい声で、「私のため?」と聞いた。

琿琿はただ彼を避けるばかりで、上半身の半分は車の外に出てしまい、頭は後ろに仰ぐようなかたちとなってヴィーブのある髪が風に乱れて車輪に巻き込まれそうだった。啓奎は、手を伸ばして琿琿の髪を留め、「気をつけて、汚れちゃうよ」と言った。琿琿はぱっと髪を振ると、毛先が彼の目に入ってしまった。「あなたには関係ないでしょう」と言った。

啓奎は、「おっと」と言って、目を揉んだが、また前かがみになって、手袋を脱ぎ彼女の髪を整理し始めた。少ししてから、手を皮のコートに入れて、彼女の首の後ろに置いた。琿琿は、「やめて、やめて、寒いわ」と叫んだ。

啓奎は、「ちょっと、暖めておくれよ」と言った。

琿琿は捻りながら嫌々と言って、しばらくすると静かになった。啓奎の手はだんだんと前に移動し、両手は彼女の喉に触れながら軽く彼女の顎を撫でていた。琿琿はじっとして動かなかった。啓奎は彼女を自分の方に抱き寄せ、彼女は啓奎の体に寄り添った。

しばらくすると、琿琿は、「あなた、また、私のこと信じてらっしゃらないの?」と

言い出した。

啓奎は、「信じてないよ」と答えた。

琤琤は歯を噛み締めて、「そのうち分かるわ」と言った。

その後、琤琤はわざと実家と離れた。旧正月や重要な祭り以外では、めったに実家に戻らなかった。姚夫人が娘に会いに行っても、十回のうち八回は、義理のお母さんとマージャンに行ったという返事を女中にした。熊致章は、何回も息子の舅の姚氏に良い地位を斡旋しても、息子の嫁は二言、三言で断っていた。姚氏は情報通であったので、その事情を知って足を踏みならして烈火の如くに怒った。しばらくして、印刷所の広告部と営業部が合併したので、姚氏は副主任となってしまう、姚氏は怒って仕事を辞めた。

このように失望した姚氏には、すでに娘たちの結婚について何も興味がなくなってしまった。姚氏は気が滅入って、何にも関わりたくなく、何も聞きたくなくなった。彼女たちに自由に対処してもらおうと決めたのである。彼の次女の曲曲は琤琤よりもっとコントロールしにくい。曲曲は琤琤より頭半分ぐらい高く、豊艶な女性で、顔の輪郭は方円型、宝石のようなピカピカする長方形の大きな目は、美しさの中に剽悍がある。姚氏は自分が絶対に彼女を束縛することができないと分かっていたので、物事の成り行き、勢いに応じて有利に導いて、曲曲が自ら正道に戻ってくることを欲した。これも父親としての苦心である。

いままで一貫して女子の就職に反対してきた姚氏は、曲曲をある大組織に推薦して、そこの秘書の仕事を勤めさせた。そこでは、彼女の一番上の上司だけはちょっとした要人であるほかは、みな少年、新人である。曲曲は人を見る目は高いが、このような優れた人物が多くいるところから、よい婿を選び出すことは難しくなかった。選択は、彼女の気のままにまかせた。

だが、曲曲が選んだのは王俊業、三等書記であった。二人はあまりにも親しく深く交際したので、このインフレの高まっている時には、カフェーやダンスホールなどでちょっと座るだけでもお金がかかってしまう。王俊業は給料に頼って生活する人なので、むろん、毎日彼女を外へ連れて行くことはできない。したがって、よく曲曲のうちを訪問することになった。最初、姚氏はその二人の関係について、あまりよくわからなかったもので、それらしく礼儀をもって彼を扱っていた。だが一旦彼についてよく調べて分かると、冷淡となり、よい顔はしないでいた。王俊業は、ずっと腰を低くしてご機嫌をとっていた。その日の夜、彼は姚氏の口調にしたがって、最近の文章の風格や書く気風の軽薄さについて批判した。曲曲が笑いながら、「姉が嫁ぐ時の父が書いた駢文啓事を、あなたお読みになった？ 探し出してあなたにお見せするわ」と言った。

王俊業は、「ちょうど、義父の大作を拝読したかったところです」と言った。

姚氏は頭を揺らして、「もういい、もういいよ、新聞に載せていたので、誤植が多く、

君には読めないかもしれないから」と言った。

王俊業は言う、「それは植字の人や校正の人があまりにも知識不足だからです。いまどきは、一般の人の純粋な美文に対する理解力があまりに不足しています。」

曲曲はさっと立ち上がって、「隣の部屋の古新聞の山の中にあるはずよ。探しに行きましょう」と言った。彼女が部屋から出ると、王俊業はすぐについて行った。

姚氏は宜興の紫泥の急須を持って、急須の口からお茶を二口ほど吸った。あの文章を思い出すと、頭を揺らしながら、詠み上げた。姚氏は立ち上がって、片手に暖かい急須を抱き、もう一つの手は急須の蓋の上を押さえながら、ゆっくり撫でていた。まるで、農民が鶏を抱えているように。身には湖色の繊細なシルクで出来た、襟を前で合わされる前ボタン式の単衣の中国服を着て、ながい鉄のようなグレーの房状の装飾の帯紐を垂らしていた。ゆらゆらと部屋の中を回って歩きながら、低い声で吟詠していた。最後になって、二句ほど良く覚えてはいなかったので、口の中へすっと一口お茶を吸って、急須をテーブルの上に置き、隣のダイニングルームに行きながら、高い声で尋ねた。「見つかったかい？ 去年十二月の新聞だよ」。未だ一語言い終わらないうちに、隣の部屋から木器のばたん、どすん、という音がする、一人は逃げ、一人が追い詰めながら、笑い声で賑やかであった。姚氏はこのとき、部屋に入っては都合がよくない、そう、万がよくない光景にばったり出会ったりするとよくないと思って、慌てて手で壁を叩いた。

隣の部屋にいる二人が止まったようで、王俊業は、「どういう口紅を塗ったの？ 苦いよ」と文句を言った。曲曲が笑って、「香料ですよ。あなたのような人のために、この口紅を選んだの。——苦ければ苦いほど効果が出るわ」と言った。

王俊業は、「このぐらいの苦みで驚くと思う？」と言いながら、ただ、まるで新聞紙巻きで人を打ったような音がただけであったのが聞こえた。

姚氏は仕方なく、末娘の瑟瑟を呼んで、何かを言いつけた。瑟瑟はドアを押して隣のダイニングルームに入った。王俊業は顔を外側へ向け、手を後ろに組んで、ただ窓の前に立っていた。古新聞は床の上に飛び散っている。曲曲はしゃがんで片付けをしている。オレンジ色の口紅が唇の上に油をたっぷり浮かせていて、頬のところにも口紅がすこし塗られていた。彼女は乳白色の氷が裂けているような模様の単衣のチーパオを身体に纏っていて、まるでミルクの上の薄い膜のようであった。肩の上もすこし口紅の色に染められていた。

瑟瑟は、「お姉さん、お母さまが呼んでいるわよ、上に行ってタンスの鍵を探してちょうだいって」と言った。曲曲は何にも言わずに、上の階に上がった。

曲曲は上に上がると、姚夫人は彼女をその場に留め置いた。曲曲は笑って、「急ぐことはないでしょう。私は王さんと結婚するつもりなんてまったくありませんわ。ただ、一時楽しんでいただけ。冗談を言っていることもあります。お母さまたちのように鈴を

揺らし、太鼓を叩いて、よその人たちみんなにそれが知られても、私のせいになさらないでね。」

この時、姚氏も上に上がってきた。彼女の話を受けて、「おー、結局われわれのせいかね？」と冷たく笑いながら話した。

曲曲は顔をよそに向けて、「いえ、いえ、私のせいですわ。遊ぶのは大丈夫ですけど、遊び相手を間違っただけではありません。もし、私が上司と遊んでいたら、話はまた別ですよね。」

姚氏は、「おまえが皇帝と一緒に遊んでも、おまえは罵られるべきだね」と言った。

曲曲は肩をすばめて笑って、「罵りは罵りであっても、嬉しいは嬉しいはずでしょう？金持ちになるのは。もし、発展することになれば、お父さまたちは皇帝の親戚になりますもの。もし、私がそれをだめにしてしまったなら、私は自らの墮落に甘んじますわ。潔癖な家風を貶してしまったのですから。お父さまが私を罵るのは、誰よりもひどいわ。私はお父さまの曲折した心はよく分かってよ。」

姚氏は怒って、体の半分が萎えるように籐椅子に倒れ、姚夫人を捕まえ、震えながら、「わが妻よ、おまえ、よくご覧。おまえがこんなものを生んだのだ。おまえは——おまえがこの娘をちゃんと躾けないから、こんな……」と言った。

姚夫人は曲曲を捕まえて、「あなたって娘はお父さまをこんなに怒らせて！」と言った。

曲曲は笑って、「今後は、王さんを家に来させませんことよ。お父さまを怒らせないようにいたします」と言った。

姚夫人は、「それならば、まだ言うこととすることが道理に合うというものよ。」

曲曲は話を受けて、「私たちは外でも遊べますわよ。恥を外でさらしても、私と関係はありませんわ」と言った。

姚氏は大声で、「出て行け」と言った。

曲曲は歩いて姚氏の後ろに回りながら、真っ赤な爪で彼の耳元を軽く撫でつけて、「お父さま、私のことについてとやかく仰らないでね。みんなに、また、娘を使って、また、人におべっか使っているとされていて、話の種になってしまうから。」と笑って言った。

この二つの「また」という二文字は、姚氏の心の中にすうと入ってしまった。彼の顔は紫になり、一時、話もできなくなってしまった。曲曲は鏡に向かって、両側の鬢の毛を軽く払いのけ、タンスを開いてコートを取り出し、しゃなりしゃなりと下に降りていったのを自分の目でじっと見ていた。

その日以来、案の定、王俊業は姚家に来なくなった。しかし、曲曲お嬢さまは、よく王俊業と喫茶店で手と手を握りながら何時間も座っているところを見られていて、いつも姚氏に伝えていた。姚氏の人受けはずっとよかったが、みんなは彼が礼儀を守る君子だと知っていて、そのほかの耳障りな話はもう彼に教えようとはしなかった。しかし、

姚氏が背を向くと、依然として人々の口はうるさかった。このような状態になると、たとえば、曲曲は堅持して王俊業に嫁ぎたくなくても、姚氏は彼女の下の子の妹の未来と評価のために、曲曲を王俊業との結婚を強制せざるをえない。

曲曲も語気を強めて、「王俊業以外に、私をしっかりとつかんでおける人はいません。お金は偽りのものです。感情こそ本物です——私はすでによく分かったのです、天下には完全無欠なものなどないということを、」と公言した。

彼女が、名声や物欲にとらわれない、慈愛至上主義を抱いてしまうと、ほかのことは差し支えないものの、姚氏は損をしてしまったことになる。こまごまと煩わしい俗事をすべて処理しなくてはならない。王俊業の手元には一文の貯金もなかった。家族は、母親以外に兄、兄嫁、弟妹がいて、ある人の家の二階にいくつかの部屋を借りている。実際のところ、新しい若奥さまに対応はできない。姚氏は仕方がなく、曲曲に別の部屋を探して、家具を買い、また、適当に衣服や飾り物を購入しただけでも、結構なお金がかかってしまった。曲曲は嫁いだ後の生活費を依然として姚氏に負担させていた。姚氏は、彼女が自分の目の前からできるだけ消えてほしいと思っていた。ほかの子供たちの反面教師にならないことを願っていたのである。だから、多少のことにはこだわるべきでなかった。

幸いなことに曲曲の下の子の妹たちの年齢はまだ小さく、三番目の心心だけがすでに十八歳になっていた。しかし、心心は珍しくおとなしすぎて、まったく、時下の風習に染まっておらず、謹んで閨房の規範を守っている。男友達など一人もいなかった。姚氏はしばらく静かな日々を過ごした。

姚夫人は静かに動き始めた。前の二人の娘のうち、一人は嫁いでもあまり満足してはおらず、もう一人は大満足にすぎている、いずれにせよともに実家の面子は損なわれている。姚夫人は一心に心心に頑張ってもらった。毎日姚氏に督促して、ずば抜けて優れた人物を物色してほしいと言った。姚氏は、心心が自ら人を選ぶことのできないことをよく分かっていた。このような大人しい娘はめったに得られないので、彼女にやり切れない思いをさせたくなく、精神を無理に強いて当然負うべき責任を果たすべく、心心の結婚候補をいろいろ考えていた。

媒酌する人は多いけれども、合格は非常にすくなかった。姚氏は、ある杭州大富豪直系の男子一人だけしかいない家系の青年に、遠くから注目していた。其の青年の名前は陳良棟という。姚氏にはある古い同僚がいて、この陳良棟の舅父³⁾とは義理の親戚関係にある。たいへん苦勞して、間接的に姚氏はその舅父と打ち合わせをした。舅父に、表面に立って客を招待し、双方に顔を合わせる機会をつくることを任せた。姚氏は、あ

3) 母の兄弟。

らかじめ、男性の方に、心心は特に恥ずかしがり屋なので、ぜひ多めの客を招待してくれ、七、八人ぐらいを揃えて、気まずくなることを避けるように、と繰り返して頼んでおいた。また、最も重要な点は宴席の座席である。陳良棟を心心の隣に並ばないでおくこと、初めてなので、双方おそろくきまりが悪いであろう、だから、二人を真向かいに座らせたほうがよく、相手をはっきりと見えるけれども、談話する必要もない……。姚氏が、そうしたことまで懸念するのは、ただ三番目の娘があまり交際上手ではないことへの思いやりだけである。彼女があまりにもはずかしすぎ、こせこせして、鷹揚でないのではないかと疑われるのを怖がっている。心心のシルエットは、あごがとがりすぎているので、ちょっと、ひ弱く、正面から見ると美しくはなかった。

紹介のその夜、姚氏はその腕を見せた。陳良棟の舅父をおごなりにしないようにして、同時に、一つの目は陳良棟を見て、もう一つ目は心心をコントロールすべくし、目じりには姚夫人を逃さないようにした。姚夫人は大きな戦いを見たことがなくて、失礼なことがおこらないかどうかだけが気にかけて仕方がなかった。宴席が終わると、彼は精も根も尽き果てていた。藤の椅子に倒れて、中国服⁴⁾とシャツを脱いで、ただ下着だけになっても、まだ、熱いと言いつらしていた。

姚夫人は、化粧を落とす間も無く、急いで浴室に駆けつけ、「どう思う？」と心心に答えを強要した。

心心は鏡に向かって、髪の毛を前の方にして顔を真っ黒に覆って、左や右に梳いて、ただ、口を開かないままだった。彼女の藕荷色⁵⁾模様を彫った麻のチーパオを隔てて、かすかにとても細い金の首飾りが胸に光っている。

姚夫人は焦って尋ねた、「言いなさい、どこが不満なのですか。かまわず全部言ってちょうだい。」

心心は、「私には言うことはありません」と言った。

姚氏は隣で聞こえて、ズボンの裾を持ち上げて、膝を叩いて、は、は、はと笑いながら、「そうだろう、そうだろう。心心には彼を批判するもの何てなにもないのだね。暮らし向きはよく、人柄も誠実でおっとりしていて、ちょうちんを持って探しても、見つけることができないお相手だね、」と言った。

姚夫人は娘を見て、嬉しくて、何を言えばよいのか分からなく、話題を持ちかけるために手を伸ばし、心心の腕を撫でて、「ちょうど、この間に予防接種をしたね、見せてごらん、こんなに腫れて……」とぶつぶつと言った。

心心は髪を後にまとめると、あのとがった顔が現れた。頬には頬紅かどうかがわからないほど、もみあげのところにも赤くなっていた。黒く深い、笑う眼、笑いの花が目

4) 男子用の単衣の長い中国服。

5) 赤みがあった薄紫色。

の底に跳ね上がっていた。姚夫人は彼女が笑っているのを見て、ますます笑うことが我慢できなくなった。

心心は、「お母さま、彼も舞台劇と映画がお好きなの。彼もダンスは好きではないの、」と低い声で言った。

姚夫人は、「好きは好き、嫌いは嫌いで分かるけれど、なぜいつも「も」なのかしら、」と言った。

姚氏は向こうの部屋で話しを受けて、「二人は志と信念が同じなのだね」と言った。

心心が、「彼はあまりモダンな女性に好感はもたないというの」と言った。

姚夫人は、「あなたたち、ほんとうにたくさんのお話をしたのね」と笑って言った。

姚氏も笑って、「ほんとうだね、私はわれわれの三女がこんなに利口者だと知らなかったよ、こんなに離れていても、眉と目がすべて話しを伝えることができるのだもの。もっと前に心心にこんなふうであるのだと知っていれば、おっかなびっくりしないでよかったのに——気を遣いすぎて心配する必要もなかったね。」と言った。

心心は桃花のセルロイドの櫛を置いて、位置を取り替え、顔を洗面器の上にもたれて、頭を垂らしながら、姚夫人に向かって、「お母さま、ただ、彼はしばらくしたら北京に帰らなければならないの。私……私……お母さまと離れたくはありませんわ。」と笑って言った。

姚氏はちょうど肌着を脱ぐところだった、其の途中で頭蓋骨の上に霹靂を打たれたように、肌着を首にかぶせたまま、浴室に突き進んで、「おまえはおかしいよ、妙なことは言うものじゃない。陳良棟は杭州人で、この一生、杭州か上海で生活するに決まっているじゃないか。彼が北京に行って何をするというのだ。」と叫んだ。

心心はびっくりして、呆然としていて、問い詰められ、絶句してしまい、長いあいだ黙り込んでしまった。

姚氏は、肌着の襟口から一對の目を出し、娘を見つめて、「おまえが言っている人は、おまえの向こう側に座っていた陳さんかい？」と聞いた。

心心は両手でのを押さえながら、かすれる声で、「陳という苗字ですが、彼は私の隣に座っていました。」と言った。

姚氏はありったけの力で、ペッと吐いたが、全部自分の肌着に吐いてしまった。「あの人は程惠蓀だよ。おまえに紹介したのは陳良棟、耳偏の陳。恥知らずな、相手をかまわない独りよがりの考えで、まさか北京に行ってしまう、お母さまと離れがたくなって、私まで恥ずかしい思いをするところであった。」と言った。

姚夫人は、彼が怒って首も紫になったのを見て、殴りかかるのではないかと恐れ、急いで姚氏を外へ押し出した。彼は外へ出て一足ドアを蹴ってしまった。ドアは「パタン」とぶつかって閉まった。心心は泣き震えていた。姚夫人は急いで、心心をよしよしと軽

く叩きながら、「人を見間違えることはよくあることよ。お父さまのせいです。事情をはつきりおまえに話していなかったからね。罰として、お父さまに御馳走していただくことにしましょう。本来ならば、彼も答礼の宴席を設けなければ成らないのです。今回は、よその関係のない人たちは必要ないわね。家の何名かと陳家の人たちだけにしましょう。」と言った。

姚氏は隣でよく聞いたので、姚夫人の話に理があると思って、自分は確かに粗忽であったと思った。だから、また戻って来て、浴室のドアを押し出したのだが、ドアは閉まっていた。心心がドアの上につ伏せになって泣いているかのようにであった。そこで、そのもうひとつのドアから入った。姚氏のあの肌着はもう頭から引っ張り出されていたが、依然として首にかぶせ、まるでフラダンスの花輪のようであった。彼は心心にきちんと、「泣かないでおくれ、もう休まなければいけないね。私は、明日彼らへの答礼の宴席を設けることにしよう。おまえがさらに一步を進んで、友だちになりたいと考えていると伝えておこう。明後日、私はみなさんを招待して、一緒に映画を見て、御馳走することにしよう。かれらの若旦那の方は、きっと何の問題もないだろう。」と言った。

心心の泣き声はさらに大きくなって、「私をまだからかい足りないの？ 私——私がいくらのろまでも、私——私は自分を守りきれないわ、」と思いついて叫んだ。

姚氏と姚夫人は互いに顔を見合わせた。姚夫人は、「もしかしたら、心心は陳良棟の顔をよく見ていなくて、安心できないのかしら、」と言った。

心心は脚をばたつかせて、「もし、よく見ていないのなら、それはそれでいいのですけれど、あの人は、椰子のような丸い頭で、髪が後で前が顔、髪が前ならすぐ後が顔——まるで区別がないのよ、」と言った。

姚氏は、心心を指差して、「彼は顔でご飯を食べているわけではない。彼が幾ら醜くても、どこへ行っても、同じ面子というものがある。おまえは自分の顔立ちがすこし整っているからといって、他人の顔が良いか悪いか、けちをつける権利があるなどと思ってはいけない。おまえの一番目の姉が、まちがって顔がどうかで我儘を言っていて、私が彼女の結婚を進めなかったら、今頃どのような人家に嫁いでいたか分かん。おまえの二番目の姉がまさしくその反面教師ではないか、」と叱った。

心心は両手でドアの上にあった銅の鍵を掴み、身体全部の重さを其の上に委ねるようにして、大声で泣き叫んだ。背中の藕荷色模様のチーパオは汗でずぶぬれになってしまった。さらに、ドアの上で皺くちゃになってしまった。

姚夫人は姚氏を引っ張って、「心心の様子を見て、やはり、未だあの程惠蓀のために泣いているのではないかしら、」と耳打ちをした。

姚氏は歯を食いしばりながら困難に打ち克って、「もし、おまえが彼女を程惠蓀に嫁がせたら、今後、おまえが娘を一人でも生んだら、水に溺れさせて亡き者にする。やは

り、田舎人たちの方法の方がもっとも徹底している。」と言った。

程惠蓀は、何回か姚氏の知り合いに頼んで、一緒に姚氏の家を訪ねて謁見した。まだ、あれこれ口実を作っては、姚氏の家に接近したがった。姚氏はすべてを断った。心は日々衰弱していき顔色も良くなかった。思いもよらなかった姚氏は、彼女より先に病気で倒れた。漢方医の診断では、気が鬱ぐために肝臓をやられたのである。

この日、姚氏は熱がありうとうとしていた。目が覚めるとある髪の毛がぼうぼうとなって乱れ、真っ赤な服を着た女性が、彼のベッドの隣に座っていた。姚氏は、両眼をぼんやりとして、彼女を見つめ、耳の中は、ぼあんとしていた。ふわりと浮き漂って、気絶しそうであった。

姚夫人は、「琿琿よ、なぜ分からないの、」と叫んだ。

姚氏がよく見ると、本当に琿琿であった。パーマをかけた髪の毛は何日間もすいておらず、ぐるぐる巻きついていて、まるで破れた筵のようだった。襟が開いていて、ボタンもきちんとはめず、上には気儘に赤いセーターを羽織ってただけで、両手で顔をすくいながら、「お父さま、お父さま、お父さまが私の代わりに決めたことよ。お父さま——お父さまがもし手を離して行ってしまうたら、私はどうしたらいいの!」と泣いて言った。

姚夫人はベッドの前に立って、この話を聞き、怒ってしまった。「もうこんな歳の人の前で、何の気遣いもないのかしら。自制心というものはないの？ たとえ、私たちを忌むでいたとしても⁶⁾、おまえは、わけもなくお父さまに呪いの言葉を言ったりしてはいけません、」と叱った。

琿琿は言う、「私は焦りすぎて、このような状況になってしまったのがお母さまには見えななの？ また私のあら捜してばかり。啓奎に外で愛人が出来て毎日家へ帰らないの。彼の一家はみんなで私を苛めるの。私のこの怨みはどこへ訴えればいいのか？」

姚夫人は冷ややかに笑って、「そんなときになってようやく、おまえは実家のことを思い出したのね。私は、ただ、雀がよいところへ飛んでいって、高い枝にとまり、私たちを放って顧みないでいることだけを知っているわ」と言った。

琿琿は、「何が高い枝よ！ 低い枝よ、いずれにしても、お父さまたちが私をあそこに送って、私を生き埋めにしたのよ。」と言った。

姚夫人は、「おまえを送ったにしても、本人が願わなければ、まさか、牛が水を飲まないのに頭を押さえつけて無理に飲ませたりはできないわ。当初のことについては、おまえはよくわかっていたはずですよ。おまえがお父さまのことをすこしでも気にかけておいてくれさえすれば、今、お父さまはこんな風になってはいないわ。たとえ、死んで棺

6) 病人は死について話すのをいやがる。

桶の中に寝ていたとしても、すくっと立ち上がって、おまえのためにきつと調停役をす
るでしょうよ、」と言った。

琤琤は、「お父さまを呪ってはいけないって、今は誰がお父さまを呪っているという
の、」と言いながら、思い切り大きい声で泣いた。姚氏の体のうえに飛び掛って、「ああ、
お父さま、お父さま、あなたにもしものことがあったら、私のような可愛そうで哀れな
運命の娘は、どこへ身を寄せればいいの？ 私のことは全部お父さまが手配したのです
から、おそらく、お父さまも冥土で安心することはできないわ、」と言った。

姚氏は、母と娘二人の口げんかを聞いて、姚夫人があまりにも意気地がなく、琤琤に
負けていて、役に立たなかったことを怨むだ。真ん中に入って厳しく琤琤に反駁しよう
とすると、姚氏は、息があるものの、力なく、とても苦勞する。意固地になって、寝返
りを打ち、内側の方を向いて寝た。

琤琤は、頭を彼のものの上において泣きながら、ぶつぶつと言った。当初、「おまえ
が熊のうちに行って、少しでも心にかなわなかったら、遠慮なく私のところに言いにお
いで。すべての責任は私が負うから、」と姚氏は言ったことがあったと、何度も言い張っ
た。姚氏は、彼女がくどくどしく自分を責めるので、五臓はまるで燃えたようになり、
何時間経ったのか分からなかったが、やっどぼんやりしてきて寝てしまった。寝て目覚
めると、琤琤もいなくなっていた。掛け布団の上は彼女の涙で濡れていた。冷たくて、
まるで子どもがおねしょをしてベッドを汚したようであった。琤琤はどこへ行ったのか
姚夫人に尋ねると、「啓奎があん娘を迎えに来て、帰りましたよ、」と言った。

姚氏の今回のこの病気は、幸いなことに体の根底が丈夫であったので、何とかこらえ
て、だんだん回復したが、活力は、以前に比べることができないほどに減退した。全快
の後、姚氏は、姚夫人がすでに心心に付き添って、程惠蓀と一緒に何回か映画を見に行っ
たことが分かった。程惠蓀もまた姚氏のうちに来てご飯を食べたことがあった。姚氏は、
もうこのことについてとやかく尋ねるのが億劫になった。彼らの好き勝手にさせた。

しかし、四番目の娘、織織、そして、もう少し小さい端端、簌簌、瑟瑟たちは皆大き
くなっていく。——一人ひとりがそれぞれより美しい。姚夫人のお腹も大きくなって来
た。きつと、また女の子である。親戚たちはみな、「よく子どもを授かった。来年姚氏
は五十大慶なので、ちょうど八仙上寿となる、」と言ったが、しかし、姚氏は、自分はきつ
とそれまで待つてはいれないのだろうと思った。

姚氏は、もはや自分は長くは生きられないだろうと思ったのである。